

日本山岳耐久レース（24時間以内）～長谷川恒男CUPの規則

大会必要装備品の制限撤廃について

本15回大会から水2リットル以上、雨具、行動食、ランプ、防寒具等の必要装備品を推奨品に変更いたしました。

15年前にレースを始めた当時は山を知らないロードランナーを初めとするビジターが多数を占めました。又、火器やツェルトを持った重装備の縦走やさんも多くいました。こうした参加者に対し安全性からトレイルランの最低装備を強制する事は安全登山教育として必然と考えました。回を重ねる中、大会の人気と愛好者が増え、トレイルランの言葉とともに専門の装備が数々発売されて行きました。クライマーが困難な壁をアタックする中で装備の軽量化とスピードが要求される様になりそれに伴うトレーニングが当然のごとく問われジムにおけるスポーツクライミングが発展して来たように、トレイルランニングも装備の軽量化と全体のレベルアップとともにスピードが要求されるようになって来ました。そしてこの大会での特徴でもある行動食やサプリメントの研究や自分の技量にあった装備を研究し、装備して参加するアスリートが増えてきました。当初の大会から飛躍的に全体のレベルアップが進むのと反比例し、近年の大会で予備関門を設定しなくてはならないトレーニング不足の参加者も増えています。又、当初、雨具といえばロードランナーがゴミ袋のかぶり物や100円コートなどの装備を持ち込み、役員と口論なったりしました。ヘッドランプからハンドランプに移行しつつあり、防寒具と雨具の併用や食料・サプリの改良品など15年前からくらべれば一つ一つの装備は遙かに発展しています。個々の必要装備品の厳選はトレーニングで山に入る回数によって自分なりに改善されるものです。

装備意識があまりにも先行すると極端にはクライミングボートにアブミをかけて登攀する様な近年の装備主義の先行に警鐘を鳴らす意味からも、初めに装備ありきではなく完走する強靱な体力の上に個人の能力に即した装備が生かされるという立場を再認識する意味からも今回の大会から必要装備品の制限撤廃を導入いたしました。

当然この大会趣旨であるサバイバルレースとして、第2関門のエイド以外のノンサポートの精神を厳しくし、軽量化と称してゴミのポイ捨てや応援仲間からやチーム同士のサポートに対しては役員一同厳しい態度（失格）で当たる事を付け加えたいと思います。

又、明らかな無節操な装備の参加者に対しては従来どうり安全登山指導を行うのは必然と考えています。

日本山岳耐久レース委員会 委員長 宮地 由文